

「標準免疫学」

谷口 克
宮坂 昌之 編集

東京医科歯科大学教授

矢 田 純 一

本書を料理に例えるならば、それぞれのメニューについてそれを得意とする当代一流のシェフが腕をふるった御馳走が並んでいて、読者はそれに大いに舌鼓を打つことができる。内容はかなり高度であり、詳しく最新情報までが記載されてある。それゆえに逆に、全くの初学者が読み進むには相当厳しいものがあるという気がする。免疫学では極めて普遍的であるけれども、初めて学ぶ人には初体験というような用語がいきなり出てくるという部分もある。したがって、大学の理科学部一般の学生がマスターしておくべき内容としてはレベルが高い。

評者の印象では、学部学生でも特に免疫学を深く学びたいと思っている者や、卒後免疫学に関連した勉強をしようとしている者が現代の免疫学を通覧したいといった目的に最適の教科書ではないかという気がする。

本書の特色の1つは編者の意図に

よるものであろうけれども、単に免疫学の知識を紹介するということにとどまらず、現代的な視点での免疫現象に関する概念を伝えようとしていること、免疫系の基本を体系化して示そうとしていること、ひいては免疫現象の中に生命現象の基本原則を見いださせるように説いていることであろう。免疫系の最大の特徴とも言えるべき、無数に近い多様性がいかに生み出され、厳密な1対1の対応性を持つという特異性が用意されるのか、自己と非自己に対する選択性がどのような機構によっているのかといった問題を軸として編集されている。読者はその中に免疫とは何かを感じとることができると思う。

もう1つ本書を特徴づけているのは、実際にみずから試験管を持ち研究を続けている本邦の代表的な学者が分担して筆を執っている点である。そのことによってこそ生きた質問が伝えられる、体験から得られた

それぞれの方の免疫に対する考え方、科学感といったものがにじみ出てくる。それは読者により強く問いかけるものがあり、読者はインパクトを受ける。免疫学の中にはいくつかの重要なコンセプトがあるけれども、その基本になった実験が具体的に随所に示されている。自分が研究者であるからこそ、そうした解説の仕方・態度が生まれてくるのであろう。読者はそうしたところからも自然科学の思考の流れを学ぶことができる。

評者は本書を通読してみて、言い知れぬ満足感を味わった。単に自分の知らなかった知識が新たに得られたということだけではない。執筆者の方々の免疫学の息吹きとでも言うべきものを体感できたからである。

● B5 頁 592 写真 50 2色図 351
表 68 1997 定価(本体 8,000 円
+税) 円 400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)